

# 朝長

観世元雅作

前

ワキ 清涼寺の僧

シテ 青墓長者の娘

トモ 従者

後

ワキ 前に同じ

ワキツレ 伴僧

シテ 大夫進朝長

地は 美濃

季は 春正月

「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の乱れに。義朝都を御ひらき候。中にも大夫進朝長は。美濃の国青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御ゆかりの者にて候ふほどに。急ぎ彼所に下り。御跡をも弔ひ申さんと思ひ立ちて候。

「近江路や。瀬田の長橋うちわたり。く。猶行すゑは鏡山。老曾の森を打ち過ぎて。末に伊吹の山

風の。不破の関路を過ぎ行き。青墓の宿に着きにけり。く。

「花の跡訪ふ松風や。く。雪にも恨みなるらん。

「是は青墓の長者にて候。

「それ草の露水の泡。はかなき心のたぐひにも。哀を知るは習ひなるに。是は殊更思はずも。人のなげきを身のうへに。かゝる涙の雨とのみ。しをるゝ袖の花薄。穂に出だすべき言の葉も。泣くばかり

なる有様かな。

下歌

「光りの陰を惜しめども。月日の数は程ふりて。

上歌

「雪の内。春は来にけりうぐひすの。く。氷れる

涙今は早。解けても寝ざれば夢にだに。御面影の  
見えもせで。痛はしかりし有様を。思ひ出づるも  
あさましや。く。

シテ詞

「ふしぎやな此御墓所へ我ならでは。七日々々に参  
り。御跡弔ふものもなきに。旅人と見えさせ給ふ

御僧の。涙をながし懇に弔ひ給ふは。如何なる人  
にてましますぞ。

ワキ詞

「さん候是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが。御跡  
弔ひ申さんため是まで参りて候。

シテ

「御ゆかりとはなつかしや。さて朝長の御ため如何  
なる人にてましますぞ。

ワキ

「是は朝長の御めのと何某と申す者にて候ひしが。  
さる事有りて御暇たまはり。はや十箇年に余り。

かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り。御跡  
弔ひ申したくは候ひつれども。怨敵のゆかりをば。  
出家の身をも許さねば。抖擻行脚に身をやつし。  
忍びて下向仕りて候。

シテ「さては取り分きたる御なじみ。さこそは思し召す  
らめ。わらはも一夜の御宿りに。あへなく自害し  
果て給へば。たゞ身のなげきの如くにて。かやう  
に弔ひ参らせ候。

ワキ「実に痛はしや我とても。もと主従の御契り。是も  
三世の御値遇。

シテ「わらはも一樹の陰のやどり。他生の縁と聞く時は。  
実に是とても二世のちぎりの。

ワキ「今日しも互にこゝにきて。

シテ「弔ふ我も。

ワキ「朝長も。

地「死の縁の。所も逢ひに青墓の。く。跡のしるし

か草の陰の。青野が原は名のみして。古葉のみの  
春草は。さながら秋の浅茅原。荻の焼原の跡まで  
も。げに北邸の夕煙。一片の雲となり。消えし空  
は色も形も。なき跡ぞあはれなりける。く。

ワキ詞

「如何に申し候。朝長の御最期の有様くはしく語つ  
て御きかせ候へ。」

シテ

「申すにつけて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入  
りて。門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ね

しに。鎌田殿と仰せられしほどに門を開かすれば。  
武具したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子。  
鎌田金王丸とやらん。わらはを頼みおぼしめす。  
明けなば河船にめされ。野間の内海へ御落あるべ  
きとなり。又朝長は。都大崩にて膝の口を射させ。  
とかく煩ひ給ひしが。夜更け人静まつて後。朝長  
の御声にて。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と二声の  
たまふ。鎌田殿まゐり。こはいかに朝長の御自害

候ふと申させ給へば。義朝おどろき御覧ずれば。はや御肌衣も紅に染みて。目もあてられぬ有様なり。其時義朝。何とて自害しけるぞと仰せられしかば。朝長息の下より。さん候都大崩にて膝の口を射させ。既に難儀に候ひしを。馬にかかり是までは参り候へども。今は一足も引かれ候はず。路次にて捨てられ申すならば。犬死すべく候。唯返すぐ御先途をも見とゞけ申さで。かやうになり

ゆき候ふ事。さこそゆひかひなき者と。おぼしめされ候はんずれども。道にて敵に逢ふならば。雑兵の手にかゝらん事。あまりにくちをしう候へば。是にて御暇たまはらんと。

地「是を最期の御言葉にて。事切れさせ給へば。義朝正清とりつきて。なげかせ給ふ御有様は。よその見る目も。あはれさをいつか忘れん。悲しきかなや。形をもとむれば。苔底が朽骨。見ゆるもの

今は更になし。さて其声を尋ねれば。草徑が亡骨となつて。答ふるものも更になし。三世十方の仏陀の聖衆も。あはれむ心あるならば。亡魂幽霊も。さこそうれしとおもふべき。

地

「かくて夕陽かげうつる。く。雲たえぐに行く空の。青野が原の露わけて。彼旅人を伴ひ。青墓の宿に帰りけり。く。

シテ詞

「御僧に申し候。見ぐるしく候へども。しばらく是

に御逗留候ひて。朝長の御跡御心しづかに弔ひ参らせられ候へ。

ワキ詞

「誠に御志有難う候。暫くこれに候ふべし。

シテ

「誰かある罷り出で、御僧に宮仕へ申し候へ。(中入)

ワキ

「さても幽霊朝長の。仏事はさまぐおほけれども。

ツレ

「とりわき亡者の貴み給ひし。

ワキ

「観音懺法読みたてまつり。

二人歌

「声満つや。法の山風月ふけて。く。光やはらぐ

春の夜の。眠りを覚ます鉦鼓。時もうつるや後夜の鐘。音すみわたる折からの。御法の夜声感涙も。うかぶばかりのけしきかな。く。

後シテ

「あらありがたの懺法やな。昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。娑婆示現觀世音。三世利益同一体。まことなるかな誠なるかな。頼もしや。きけば妙なる法の御声。

地

「吾今三点。

シテ

「楊枝浄水唯願薩埵と。

地

「心耳を澄ませる玉文の瑞諷。感応肝に銘ずる折から。

シテ

「あら尊の弔ひやな。

ワキ

「ふしぎやな觀音懺法声すみて。灯の陰幽なるに。まさしく見れば朝長の。影の如くに見え給ふは。若々夢かまぼろしか。

シテ

「もとより夢まぼろしの仮の世なり。其うたがひを



止め給ひて。猶々御法を講じ給へ。

ワキ「げに／＼かやうにま見え給ふも。偏に法の力ぞと。

思ひの玉の数くりて。

シテ「声を力にたよりくるは。

ワキ「まことの姿か。

シテ「まぼろしかと。

ワキ「見えつ。

シテ「かくれつ。

ワキ「おもかげの。

地「あれはとも。いはゞ形や消えなまし。／＼。消え

ずはいかで灯を。背くなよ朝長を。共にあはれみ

て深夜の。月も影そひて。光陰を惜しみ給へや。

げにや時人を。待たぬ浮世のならひなり。唯何事

もうち捨てゝ。御法を説かせ給へや。／＼。

シテクリ「それ朝に紅顔あつて。世路にほこるといへども。

地「夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ。

サシ「昔は源平左右にして。朝家を守護し奉り。

地「御代を治め国家をしづめて。万機の政すなほなりしに。保元平治の世のみだれ。いかなる時か来りけん。

シテ「思はざりにし弓馬のさわぎ。

地「ひとへに時節到来なり。

クセ「さる程に。嫡子悪源太義平は。石山寺に籠りしを。多勢に無勢かなはねば。力なく生捕られて。

終に誅せられにけり。三男兵衛の佐をば。弥平兵衛が手にわたり。是も都へぞ捕られける。父義朝は是よりも。野間の内海に落ちゆき。長田をたのみ給へども。頼む木のもとに雨もりて。やみくと討たれ給ひぬ。いかなれば長田は。ゆひかひなくて主君をば。討ち奉るぞや。如何なれば此宿の。あるじはしかも女人の。かひぐしくも頼まれて。一夜の情のみか。かやうに跡までも。御弔ひにな

る事は。

シテ「そもくいつの世の契りぞや。

地「一切の男子をば。生々の父と頼み。万の女人を。生々の母と思へとは。今身の上に知られたり。さながら親子の如くに。御なげきあれば弔ひも。誠に深き心ざし。請けよろこび申すなり。朝長が後生をも。御心やすくおぼしめせ。

ロンギ地「げに頼むべき一乗の。功力ながらになどされば。

いまだ嗔恚の甲冑の。御有様ぞいたはしき。

シテ「梓弓。もとの身ながら玉きはる。魂は善所におもむけども。魄は修羅道に残つて。しばし苦しみを受くるなり。

地「そもく修羅の苦患とは。いかなる敵に合竹の。

シテ「此世にて見しありさまの。

地「源平両家。

シテ「入り乱るゝ。

地

「旗は白雲紅葉の。散りまじり戦ふに。運の極めの  
悲しさは。大崩にて朝長が。膝の口をのぶかに射  
させて。馬の太腹に射つけらるれば。馬は頻りに  
はねあがれば。鎧をこして下り立たんとすれど  
も。難儀の手なれば。一足もひかれざりしを。乗  
替にかきのせられて。憂き近江路を凌ぎ来て。此  
青墓に下りしが。雑兵の手にかゝらんよりはと。  
思ひさだめて腹一文字に。かき切つて其まゝに。修  
羅道に遠近の。土となりぬる青野が原の。亡き跡  
訪ひて給びたまへ。亡き跡を訪ひて給び給へ。